

英語科における指導と評価の実践 ～豊かな表現力をはぐくむ評価の方法を求めて～

上 田 陽 一 郎

はじめに

平成14年度から全面実施となった学習指導要領も3年目を迎える。評価についても、これまでの相対評価から、観点別目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）に移行した。私を含む現場の教師は日々の授業の中で、生徒をどう見取り、どのように評価していくべきなのか試行錯誤してきた2年間ではなかったであろうか。

学習指導要領における外国語科の目標は「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」とある。特に強調されているのが「聞くこと・話すこと」という口頭でのコミュニケーション能力であるが、本研究ではその2つの力に限らず、基礎・基本的な英語力を生徒が身につけるにはどのような指導を行ない、評価し、その評価を次の指導にどう生かしていくと効果的であるかを、実践を通して考察していきたい。

1 研究の基盤

(1) 英語科では何を指導するのか

学習指導要領における外国語科の目標は前述したが、そこに示されているものは次の3項目である。

- ① 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。
- ③ 聞くこと話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

中学校英語科ではこの「目標」を受けて次の4つの観点に基づき、指導計画が立てられ、授業が展開され、評価が行われていく。

《コミュニケーションへの関心・意欲・態度》

コミュニケーションに関心を持ち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。

《表現の能力》

初歩的な外国語を用いて、自分の考えや気持ちなど伝えたいことを話したり、書いたりして表現する。

《理解の能力》

初歩的な外国語を聞いたり、読んだりして、話し手や聞き手の以降や具体的な内容など相手が伝えようとすることを理解する。

《言語や文化についての知識・理解》

初歩的な外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身につけるとともにその背景にある文化などを理解している。

学習指導要領改訂に伴い、本校では「年間評価計画」（別表1）と「単元別評価計画」（別表2）を作成し、年間を通じて単元ごとにどのような指導を行い、また評価していくのかを一覧形式にまとめた。必修教科としての英語もさることながら、選択教科としての英語についても作成している。（本研究では必修教科としての英語の指導と評価に視点をあてたものであるため、選択教科についての言及は控える。）

年間評価計画を作成するにあたって次のような事項に配慮をした。

- ① 年間を通じて4技能（聞く・話す・読む・書く）がバランスよく配置されていること
- ② 単元ごとに評価規準を簡潔にまとめて表記すること

また、単元別評価計画を作成するにあたっては次の2つについて配慮した。

- ① 年間評価計画を受けて、単元ごとにより詳しい評価規準を表記すること
- ② 評価の元になるもの（何をを用いて評価するのか）を観点別に表記すること

(別表1) 年間指導計画 英語科2年

月	課・題 材 名 目 標	主な学習活動・内容	時数	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての知識・理解
4	ガイダンス ・これから1年間の英語学習の見通しを持つ。	・英語学習の仕方のガイダンスを聞く。 ・スピーチ活動の確認をする。	1	・これからの学習方法を理解することができる。	・要点をメモしながら話を聞くことができる。		
	第1課 Bob's Stay in Japan オーストラリアからの中学生 ・規則動詞の過去形について確認することができる。	・1年の復習(-edを中心に) ・接続詞when ・オーストラリアの生活、社会などについて知る。 ・オーストラリアでの日本語学習について知る。	4	・オーストラリアの文化や学校事情に興味を持つことができる。 ・春休みに友達が出たことを聞くことができる。	・接続詞whenを用いて自分のことを表現することができる。 ・会話を役割分担して言うとき、感情をこめると言うことができる。	・教科書本文を読み、その内容を日本語で言うことができる。 ・友達の春休みの行動を理解することができる。	・規則動詞過去形の運用を理解している。 ・オーストラリアの日本語学習について、理解している。
5	第2課Mukami's ThreeLanguages あなたの母語は何？ ・不規則動詞の過去形を学ぶ。	・went～。 ・Did you go ～？ ・I did not go ～。 ・ケニアにおける言語事情を知る。 ・多言語使用地域における母語と共通語の役割について考える。	4	・不規則動詞の過去形を用いて、自分の行動を表現しようとすることができる。 ・多言語使用地域における母語、共通語、公用語の関係について調べ、それを発表しようとするすることができる。	・不規則動詞の過去形を用いて自分のことが表現できる。 ・相手に過去のことを聞く文を作らねることができる。	・教科書本文を読み、その内容を日本語で言うことができる。 ・教師や友達の英語を聞いて、何時に何をしたかをおおむね理解できる。	・不規則動詞の活用、疑問文・否定文を理解している。 ・ケニアの3つことばの役割について、理解している。

(別表2)

第1課 Bob's Stay in Japan (4時間) オーストラリアからの中学生

時	主な学習活動・内容	評価方法・基準等				配慮事項
		ア. 関心・意欲	イ. 表現	ウ. 理解	エ. 知識	
1	○Bobの自己紹介を読んで内容をとらえる。 ○過去形疑問文を用いて友だちの行動について質問する。	○積極的に質問活動に参加している。(生徒観察、ワークシート等)	○自己紹介で使われる日本語のあいさつを英語で表現することができる。(発表等)	○自己紹介を聞き、その内容を日本語で言うことができる。(発表等)	○オーストラリアの日本語学習について理解している。(発表、ワークシート)	○ワークシートの準備 ○質問活動中における対話の確認・支援 ○オーストラリアについての補助教材の準備
2	○Bobと久美の対話をとらえる。 ○オーストラリアでの日本語学習について ○BobとKenの対話をとらえる。 ○オーストラリアのスポーツについて	○オーストラリアのスポーツ(クリケットやフットボール等)について積極的に調べようとする。(ワークシート等)	○自分の身近な事柄について、昨日やしたことなど過去形を用いて書くことができる。(ノート等)	○過去の事実についての疑問文とその応答文を聞き、対話の内容を理解することができる。		
3	○LET'S COMMUNICATE!		○Did you～? の文を用いて、過去の事実についてたずねることができる。また、それに答えることができる。(生徒観察、ワークシート)	○When の節を用いた、「～するとき、…だ」の説明文を聞いて、その内容について日本語で説明することができる。		
4			○When の節を用いて、「～するとき、…だ」の説明文を言うことができる。 ○春休みに友だちが出たことについて英語で書くことができる。	○テープの登場人物、Yumiko, Sachiko, Chiakiが春休みにやったことを聞き取り、どこで、何をしたかについて日本語で言うことができる。		
単元終了後の評価		・学習記録表	・ワークシート	・ワークシート	・ワークシート	

(2) 何をどう評価していくのか

① 4つの観点を何を規準に評価していくのか

評価するにあたって、4つの観点をもとに評価していくことは前述したが、それでは生徒の学習活動のどのような場面で、また何に基づいた評価をしていくのかということが重要になってくる。もちろん教師の指導がなければ生徒の活動も展開されないわけであるから、どんな指導をおこなうかがそのまま生徒の評価につながっていくといっても過言ではないであろう。

平成14年2月に国立教育政策研究所から発表された「評価基準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料－評価規準、評価方法等の研究開発（報告）－」によると、「外国語科では、学習指導要領の内容の言語活動における「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」を内容のまとまりとして、これらごとに評価規準を作成した。」とある。内容のまとまりごとの評価規準の詳細についてはここでふれることを控えるが、詳細は次のホームページに掲載されているので御覧いただきたい。(http://www.nier.go.jp/kaihatsu/houkoku/stgaikokugo.pdf) それぞれの観点ごとには次のような視点から生徒の活動を評価するように書かれている。

《コミュニケーションへの関心・意欲・態度》

- ア 言語活動への取組
- イ コミュニケーションの継続

《表現の能力》

- ア 正確な発話・音読・筆記
- イ 適切な発話・音読・筆記

《理解の能力》

- ア 正確な聞き取り・読み取り
- イ 適切な聞き取り・読み取り

《言語・文化に関する知識・理解》

- ア 言語に関する知識
- イ 文化に関する理解

例として、表現の能力にかかわる【話すこと】【書くこと】の評価規準の具体例を挙げてみる。

【「話すこと」の評価規準の具体例】

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての知識・理解
(言語活動への取組) ・間違ふことを恐れず自分の考えなどを話している。 ・言語活動において、自ら学んだ表現などを使っている。 ・関心をもって質問している。 ・ペアワークやグループワークなどにおいて必要に応じて協力しあっている。	(正確な発話) ・正しい強勢、イントネーション、区切りなどを用いて話すことができる。 ・文法に従って正しく話すことができる。 ・話そうとすることを聞き手に正確に伝えることができる。		(言語についての知識) ・単語の発音の違いなど語句や文を正しく発音する知識を身に付けている。 ・場面や状況による強勢やイントネーションの違いを理解している。 ・語句や文の使い分けがわかる。 ・場面や状況にふさわしい表現を知っている。 ・文構造についての知識がある。
(コミュニケーションの継続) ・理解してもらえるように、別の語句や表現で言い換えたり、説明して伝えるなどの工夫をしている。 ・つなぎ言葉を用いるなど、不自然な沈黙をせず話し続けている。	(適切な発話) ・伝えたい内容、場面、相手によって語句や表現を選択し話すことができる。 ・聞かれたことに対して適切に回答することができる。 ・適切な速さや声の大きさを話すことができる。 ・相手の理解を確認しそれに応じて話すことができる。		(文化についての理解) ・家庭、学校や社会における日常生活や風俗習慣などを理解している。 ・人々のものの見方や考え方などの違いについて理解している。

【「書くこと」の評価規準の具体例】

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
<p>(言語活動への取組)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・間違ふことを恐れず自分の考えなどを書いている。 ・ペアワークやグループワークなどにおいて必要に応じて協力しあっている。 ・読みやすい字で書いたり意欲的に書き直したりしている。 ・言語活動において、自ら学んだ表現などを使っている。 ・必要に応じて辞書などを活用している。 <p>(コミュニケーションの継続)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理解してもらえるように、別の語句や表現で言い換えたり、説明して伝えるなどの工夫をしている。 ・表現できないところがあっても知っている語句や表現を用いて書き続けている。 	<p>(正確な筆記)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文法に従って、正しく書くことができる。 ・書こうとすることを読み手に正確に伝えることができる。 <p>(適切な筆記)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝えたい内容、読み手、ジャンルなどによって、語句や表現、文章形式を選択し書くことができる。 ・文のつながりや構成を考えた文章を書くことができる。 ・内容を整理し、必要な分量を書くことができる。 		<p>(言語についての知識)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文字や符号などを使い分ける知識を身に付けている。 ・語句や文の使い分けがわかる。 ・場面や状況にふさわしい表現を知っている。 ・文構造についての知識がある。 <p>(文化についての理解)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭、学校や社会における日常生活や風俗習慣などを理解している。 ・人々のものの見方や考え方などの違いについて理解している。

「評価基準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料－評価規準、評価方法等の研究開発（報告）－」,
国立教育政策研究所（2002. 2）より抜粋

② どのように評価していくのか

本校は、本年度「平成15年度 全国のかつ総合的な学力調査の実施に係る研究指定校」となり、特に評価にかかわる調査研究を進めていくこととなった。それにあたって、これまでの実践を評価の視点から捉えなおし、評価に関する研究を行った。

2 実 践

本年度は特に「豊かな表現力」をはぐくむための指導と評価のあり方について考えてきた。そこで次のような実践を通して生徒の表現力の向上に努めてきた。

(1) 話す能力を伸ばすために ～インタビューテスト～

話す活動を中心に構成された教科書の“Let's Talk”の題材を用いて、言語活動への取組と正確な発話と適切な発話について個々に評価をおこなっている。この題材は通常使用している教科書の中の、主に「話すこと」に重点を置いた内容である。

評価する観点は、「話すこと」における関心・意欲・態度、そして「話す力」における「適切な発話」「正確な発話」とした。



(2) 書く能力を伸ばすために ～英作文添削～

こちら教科書の「書くこと」を中心とした内容を扱う時間に行った。書くことの指導には個々のレベルに応じた指導が必要で、個別の指導にならざるを得ない。また、生徒の書きたい英語と能力の間のギャップが大きければ大きいほど教師の手助けが必要となる。そのギャップを埋めるために生徒に力をつけられるよう支援していくのであるが、その支援の方法や程度の問題等は、目の前にいる生徒をどのように見取るかによって対応はさまざまである。

今回の英作文添削で大切にしたいことは、生徒が書いたものを教師が生徒のいないところで添削し返却する方法ではなく、生徒の目の前でどこを工夫したらよいかや手直しするところはどこかを伝えることである。この方法でおこなってよかった点は、生徒に表現したいことを確認でき、他の言い回しができないか一緒に考えることができたり、単に単語レベルで援助が必要であれば、辞書の引き方を伝えることができるなど個に応じた指導ができた。

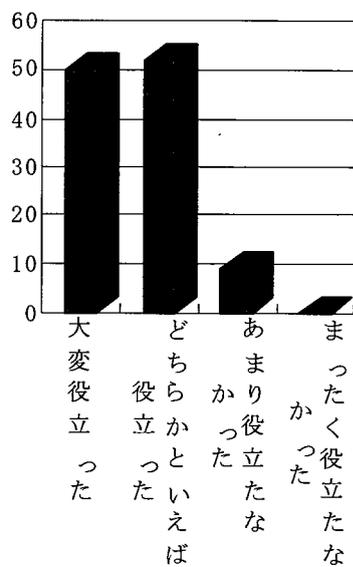
(3) 表現力の基礎となる言語材料の習得のために ～小テストの実施～

自分の思いや考えを適切に、かつ正確に伝えようとするならば言語材料の習得は欠かせない。自分の発した（表記した）英語が相手に伝わるのだという自信とコミュニケーションの楽しさを身につけた生徒にとっては、単語や文法の習得はその後の外国語学習においてはそう苦になるものではないであろう。

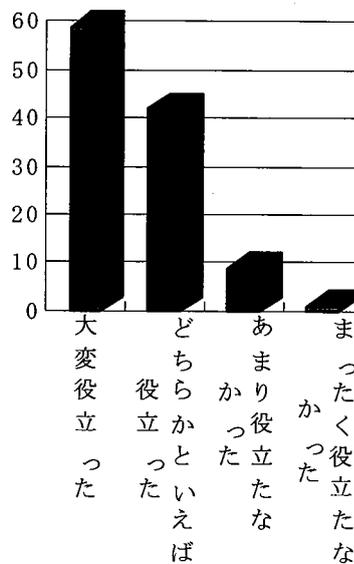
この活動は前時に範囲を指定し、その中の「単語」「新出文型」を筆記によって、「本文の内容」を聞き取りによって確認をするというものである。授業の最初のところで小テストを行い、評価をおこなった。

アンケートの結果は次のようになった。

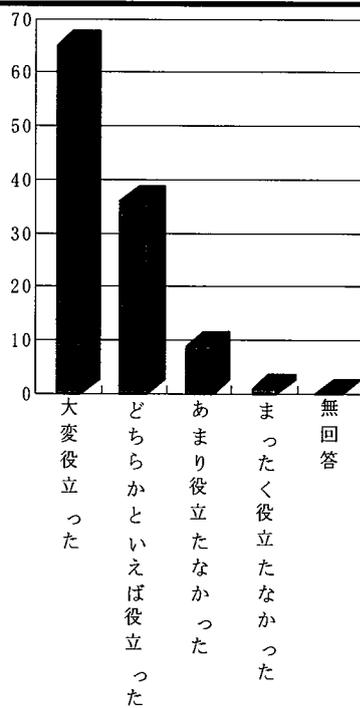
A-1 インタビューテストは話す力をつけるのに役立ったか



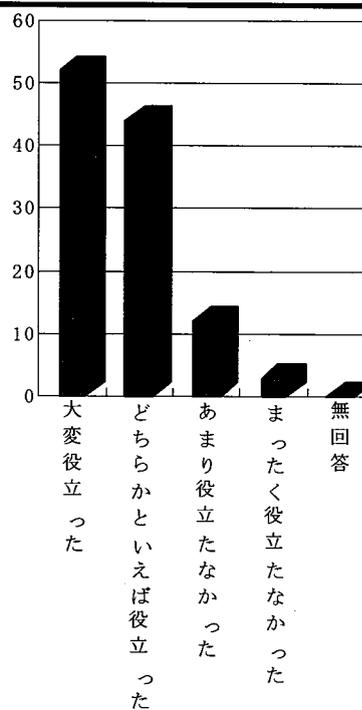
A-2 英作文の添削は書く力をつけるのに役立ったか

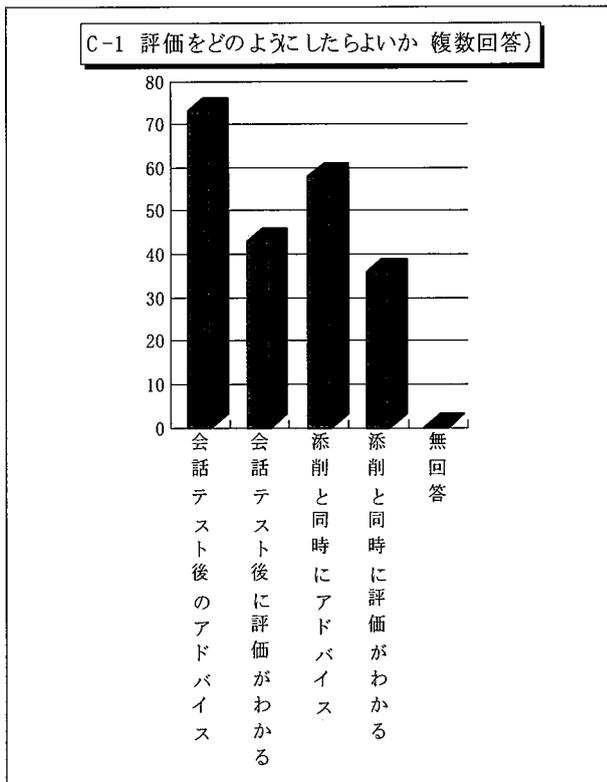
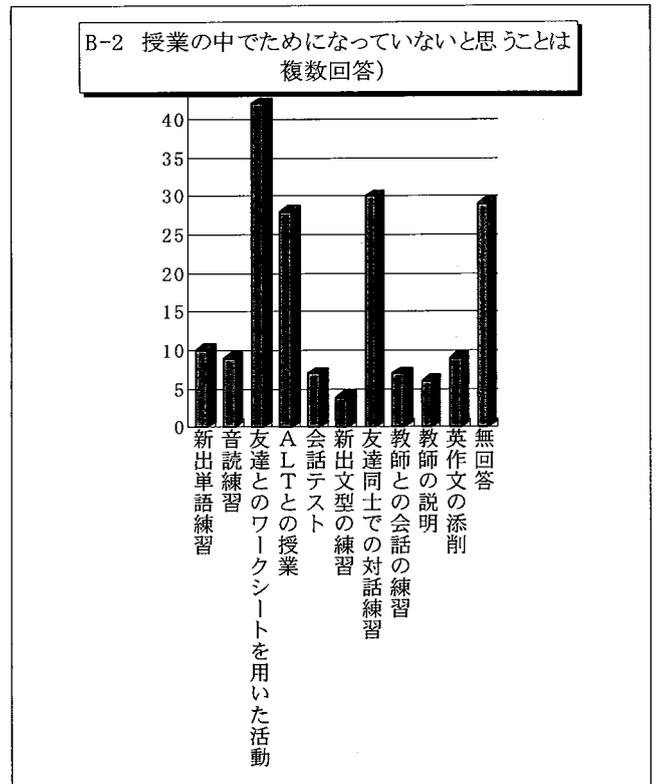
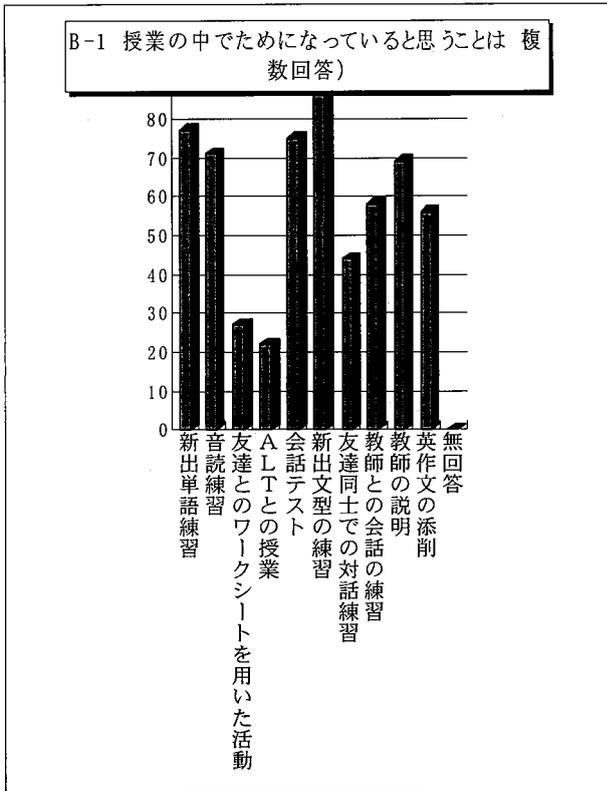


A-4 小テストは単語を覚えるのに役立ったか



A-5 小テストは文型を覚えるのに役立ったか





今回行った評価方法について生徒の反応は概ね好感を持って受け入れていると考えられる。特に添削指導については「大変自分のためになった」と考える生徒が半数を超えている。インタビューテストについても「どちらかといえば役に立った」と考える生徒を含めると約9割の生徒にとって効果的であったと考えられる。一方、小テストについてはテストの内容によって差がみられた。言語材料を習得するための単語テストは効果的であったと考える生徒が多くみられる反面、聞き取りの活動や文型確認テストはあまり力がついたと感じられなかった生徒が、他の学習活動よりも多く見られた。

このことから、「話すこと」における「適切な発話、正確な発話」や「書くこと」における「適切な筆記」の評価については生徒のニーズと合致したものがあり、生徒の能力を評価するのに有効であると同時に、個々の生徒にきめ細かく指導できると考えられる。評価したその時点での生徒の能力を把握し、指導に生かしていくにはこうした指導と評価の一体化が大切ではないかと考えられる。

「インタビュー」での「話すこと」の評価より「添削」による「書くこと」への指導の方が「より役立った」と捉える生徒が多いという結果が見られた。一方「聞くこと」における「適切な聞き取り、正確な聞き取り」の評価方法については、生徒が自分の力が伸びたかどうか実感するにはいたっていない面もあったと推測される。言語材料の習得状況の評価についても、文型を理解し定着させることが、4つの技能を伸ばしていくために不可欠であることの意識が生徒にしっかりと伝わっていなかった面があり、今後の課題であると考えられる。

また、日々の授業への改善点も見えてきている。「ALTとの授業」や「友だちとのコミュニケーション活動」は自分の能力を高める活動とらえている生徒が他の項目に比べると少なかった。この結果はややもすると「力をつける」ということが単に「言語材料の習得のみ」であるという意識につながりかねない。習得した知識を使用できる場作りの工夫がこれからももっと必要であると強く感じた。

おわりに

表現力をはぐくむ指導と評価の実践を通して、今後も評価方法について研究を深めていきたいと考えている。その際に、生徒の実態に即したものであることと、教師の過度な負担にならないものであることに留意したい。また「評価のための評価」ならぬよう、生徒の指導に生かすことができ、ひいては生徒の能力の向上に役立つものであるようにしていきたい。

《参考文献》

- 北尾倫彦・長瀬荘一編（2003），『観点別評価 実践事例集 中学校 英語』 図書文化社。
国立教育政策研究所（2002），「評価基準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料－評価規準，評価方法等の研究開発（報告）－」。

（うえだ よういちろう・英語科）

E-mail アドレス yoichiro@edu.shimane-u.ac.jp